<翻　訳>

トーマス・ムルナー：阿呆祓い（2）

名古屋初期新高ドイツ語研究会訳
（代表　精園修三）

ここに翻訳したのは1512年に刊行されたThomas Murner: Die Narrenbeschwörung の第6章から第10章までである（第5章までは『中京大学教養論叢』第38巻第4号に所載）。使用テキストはFranz Schultz編集のムルナー全集Thomas Murners Schriften mit dem Holzschnitten der Erstdrucke の第2巻（M. Spanier編，Walter de Gruyter 1926年刊）を使用し，適宜Kürschner: Deutsche National-Literatur の版等を参照した。また聖書に関しては『聖書新共同訳』（日本聖書協会1987年版）に拠った。

この翻訳は，名古屋初期新高ドイツ語研究会が1994年6月から，メンバーが分担して訳していたものを，最後に共同で検討修正したものである。1998年6月現在のメンバーはつぎのとおりである。青木一行（名城大），木野茂（藤田保健衛生大），工藤康弘（三重大），精園修三（中京大），橋本忠欣（福井大），松尾誠之（愛知県立大），森昌弘（名大名誉教授），山田やす子（皇学館大）（以上アイウエオ順）。

訳分担表（括弧内は何らかの事情により今回の翻訳原稿の整理を代行した者）

第六章　大沢（精園），木野
第七章　工藤
第八章　精園
第九章　中条（森）
第十章　橋本

第六章[1]　阿呆の卵を孵すこと[2]

阿呆の卵を孵すのには訳があるのだが，
　私がそれで得することは滅多にない。
食べさせたり，温めたりしてやっても，
　みんな親の阿呆の所へ飛んで行く。

かっこう鳥が孵してくれた
　阿呆が今でも大勢いる。
それは，「酒が入れば，阿呆は出ていく」とばかりに，
　ワインを飲み熱くなって，
座っている阿呆どものことだ。
　そんな時，この連中は数々の戦さについて，
激しい切り合い，殺し合いについて喋りまくり，
　ナポリ，ゲルデルン，オランダでの戦争のこと[3]，
スイス人と戦ったこと[4]など，
　嘘八百を並べ立てる，
自分はロザリオの珠の数ほど人を殺し，
　戦争での策略は何でも知ってる，と。
また，ここかしこで，
　ヴェニス[5]で，バイエルン[6]で目下行なわれている
大殺戮について喋って，
　阿呆の卵を孵す。
自分たちの武勇を喋り尽くすと，
　マクシミリアン王[7]が
自分たちに金を払ってくれないと，
　ひどい苦情を散々言って，
　あのまっとうな王に対してあることないことを口にする。
しかし，王に金を払う気があっても，
　払わないのが連中に対する当然の報いというものだろう。

誰が損をしようと知るもんか，
25　人の難儀には限りがない。
私は，勇ましく男らしく戦う
まともな傭兵のことを言っているのではない。
私が言っているのは，ワインを飲んで口論し，
金持ちのお偉方と思われたがり，
30　拷問，流血，肉裂き，傷害以外には
真面目なことは何一つできない連中のことだ。
連中が聖人の名を口にするのは，
その聖人の名にかけて他人を罵るとき，
フーベルトウス[8]，ヴァレンタイン[9]，聖クヴィリヌス[10]，
35　それに洞窟のなかの聖ファイト[11]，――この方々は私に
とっては聖人だが，連中の罵り言葉に使われては，聖人にとってはい
い迷惑だ。
聖人たちも同じことを連中にやり返せばいい。
次に登場するのが，
錬金術に詳しく，
40　銅から金をつくると称する連中で，
家の梁が重さに耐えかねて砕けるほどの大嘘をつく。
昔は，厚さおよそ二尺半の
板越しに嘘をついたが，
今は，たとえ三つの山が間にあっても，
45　鋼のように硬い山越しに嘘をつく。
自分の耳を指さして，
賢者の石[12]をもってると言う奴もいるが，
これこそ正に札付きの馬鹿で，
五番目の物質[13]を孵すというが，
50　そんなことはみんな嘘っぱちだ。
その次に登場するのが遍歴学生だ，
ヴィーナスの山[14]から来た色男で，
タンホイザーのことをいろいろ話したり，

タンホイザーの罪を免じようとしなかった
55　教皇をなじったり，
ヴィーナスはとても美人だ，
しかし今は門が閉まっていて，
その前には絞首台が二つある，と言う。
それが本当なら，雷に打たれて死んでもいい。
60　その次に，悪魔祓師たちと
手相見たちが登場する。
一人がソロモンの指輪[15]を持っていて，
いろいろな法螺をふくが，それは法螺だとすぐわかる。
他の一人が悪霊を
65　グラスか，親指のなかに封じ込んでいると言う。
それをしっかり詳しく見ると，
馬鹿げたトリックだとわかる。
私は酒を飲んで，目に涙したとき，
グラスのなかに大勢の悪魔を見た。
70　連中はソロモンの鏡[16]ももっている，
なかを覗けば，阿呆が見える，と言う。
この連中の嘘にはきりがなかった。
いい加減にして，悪魔に喰われるがいい。
やがて連中は魂についても嘘をつき，
75　しまいには神と世間を欺くのだ。
続いて登場するのが藪医者たちだ，
どの悪魔も，どの阿呆も，
藪医者ほどいい加減な軟膏を塗ったり，
かくも大勢の人に惑わすことを教えたりはしなかった。
80　お前たち藪医者はいつまでたっても利口にならない。
その軟膏を塗ると，こっちは命を落とすのだ[17]。
阿呆は神の戒めを
謝肉祭のお笑いと見なし，
当然のことながら神を信頼しているけれども，

85　　余りにもその救いを当てにしすぎている。
罪を犯すのをやめようと思わぬものは，
　　神の救いを当てにしすぎているが，
その神はお前たちを火と煙のなかで滅ぼすのだ。
　　こうした性悪な阿呆が
90　もう口を開いたり，嘘をついたりしないことを，
　　そしてもう正直な人を騙さないことを願う。
大学にはもっと沢山の阿呆がいて，
　　この連中も阿呆の卵を手に入れようとする。
学問を学ぶべきときに，
95　　悪戯をして歩き，
町中をほっつき回る。
　　私はこの連中も阿呆の仲間に加えざるをえない。
連中は学位を手に入れたが，
　　それは金の力によるものだ。
100　たとえお前たちが卒業できなくても，
　　国外に追放されたりはしなかったろう。
お前たちは学問に励むとき，
　　緑の絹で裏地をつけた
外套をさがしてひっきりなしに駆けずり回り，
105　　銘々が平帽子[18]をかぶり，
不遜にもペーター教授[19]になったつもりで，
　　重々しい足取りで登場する。
七学芸[20]の教授のつもりなのだ。
　　ああ，困ったことだ，その七学芸の中身は半分もない。
110　第一の学芸はラテン語を上手に話すことだ。
　　よく調べてみれば，
連中は市門の前でならラテン語が話せる，
　　それもそこにラテン語のわかる人がおらず，
路上には連中の耳にラテン語をささややく人が
115　　一人も歩いていないときのことだが。

だから連中にはドイツ人であることの有り難みがわかっている。
　修練が足りないので，
ロギカ[21]とは，正しい学説によれば，
　粉屋の娘グレーテの親戚の名前かどうか，
120 それさえわからぬ連中が
　しばしば教授になった。
修辞学の場合も同様だ。
　そう，口説きの手紙を書こうとすると，
言葉を鮮やかに彩り，
125　ドイツ語の文章をぴかぴかに磨き上げる。
連中が音楽から学ぶことは，
　格闘し，投げつけ，突き刺し，飛び上がるような格好で，
リューテ，ハープ，バイオリンを演奏し，歌を歌うことだ。
　間違いない，連中は身が軽く，
130 音楽に大いに励んでいる。
　巨匠の感覚がなせる業だ。
算術で連中は数えることを学ぶ，
　そこで息子はあまりにも沢山，
財産収入以上のお金を使うので，
135　困り果てる父親も数多い。
幾何学は測量を教える。
　だから飲み屋までどれほどの距離があるか，
　十分知り尽くしている。
連中は何度も測っているから，
140　簡単に忘れはしないのだ。
天体の運行，天文学，
　連中はこれにも熟知している。
一日を十二時間ずつにして，
　夜の時間を睡眠に当てることもとっくに知っている。
145 天体のことで連中が知らないことは何もない。
　というのは毎日それを見ているからだ，

朝ベッドのなかで，
　　太陽が正常な動きをしているかどうかを。
親愛なる阿呆たちよ，ゆるしてくれ。
150　　私がお前たちを慇懃に引っ張りだすことを。
よくわかっている筈だ，私が誰のことを言っているのか，
　　また，学者たちを非難しているのではないことを。
私は，学校で
　　親が稼げないほど沢山のものを
155　きれいに平らげて平気な私の同類や，
　　私のことを言っているのだ。
これが今の七学芸だ。
　　すなわち，遊び仲間をみつけたら，
腰を下ろして，賭をはじめよ，
160　　桶でワインをがぶ飲みし，
飲み，食い，賭けて，楽しくやれ。
　　父親が代金の払ってくれるなら，
とやかく聞くな。
　　父親が苦情を言おうとしたら，
165　Misterinum gebelinum（ひっこんでろ）[22] と
　　自己流のラテン語で言え。
私は連中をしっかりと教育しておいたので，
　　私の教えを心に留めた奴は，
この町から galgelinum（絞首台まで）[23]，
170　　立派なラテン語があやつれるだろう。
私たちは阿呆の卵を孵すまで，
　　この本物の学問をしっかり番するのだ。

注

(1)　この章は酒を飲んで大言壮語し，法螺を吹く人々への批判である。

(2)　原文は Geuch ußbrieten（郭公の卵を孵す）。「郭公」には「阿呆」の意味もある。

(3)　ナポリでの戦争は15世紀末に，ゲルデルン（ノルトライン・ヴェストファー

レン州の小都市）での戦争は1465－71年と1499年に起こった。オランダでの戦争に付いては不詳。

(4) 1449年に行われたシュヴァーベン戦争のこと。

(5) ヴェニスでの戦争は1509年に行われた。

(6) バイエルン継承戦争は1502－1505年に行われた。

(7) マクシミリアン一世（1459－1519）は神聖ローマ帝国皇帝，ブルゴーニュ公女と結婚して版図をひろげ，子，孫を各国の王子，王女と結婚させてハプスブルグ家繁栄の基礎を築いた。一方，スイスの独立をゆるし，フランス王と対立して，前述のように，各地で戦闘をくり拡げることになった。

(8) Hubertus, 原文では Huprecht（ca. 655－727）はベルギーのリエージュの司教，猟師の守護聖人。

(9) Valentin, 原文では Velten（? － ca. 269）はてんかん病患者の守護聖人。

(10) Quirinus, 原文では Kürein は万病の患者の守護聖人。

(11) Veit, 原文では Vit（? －303/ 305）はシチリア出身の少年で殉教し，十四救難聖人の一人となる。舞踏病患者の守護聖人。

(12) 錬金術師が鉛を金に変える力があると信じた石。

(13) 古代から考えられていた四元素（土，水，空気，火）の次の物質。

(14) 女神ヴィーナスが住むという伝説のある山は，シュヴァーベン地方とチューリンゲン地方にいくつかあるが，ここではタンホイザー伝説と結びついたアイゼナハに近いヘールスベルク（Hörsberg）を指す。

(15) 知恵と魔術の護符と見なされていた。

(16) 未来を映し出すことが出来るとされていた。。

(17) 原文は Wo man schmiert, do fart man gern.（油をさせば，車の走りは良くなる。）で，schmieren には「油をさす」のほか「軟膏を塗る」の意味もある。ここで塗られるものは水銀。

(18) 大学教授，裁判官，聖職者が職務上着用する平たい縁なし帽。

(19) 第5章8行目の注を参照。

(20) 中世大学で行われた基礎的教養科目。文法，修辞，論理，算数，幾何，天文，音楽で七自由科目とも言う。

(21) 論理学のこと。

(22) ドイツ語の Mist（堆肥）と Gabel（フォーク），すなわち「堆肥をかき回すフォーク」を作為的にラテン語化した造語。「堆肥用フォークを手に取れ」ぐらいの意

(23) ドイツ語の Galgen「絞首台」を注(22)と同じくラテン語化した造語。

第七章[1]　神とともに山羊を見張ること[2]

私たちは神の価値を見落としがちだ。
　神が私たちと遊ぶときは，神は牧者だ。
この遊びの決まりは，
　私たちが倒したものを，神が起こすことだ。

あるとき神はここにいる私たちのところへやってきて，
　父親の心をもって
やさしく，温かく助けてくれた。
　そのことで神はしばしばここで報いを受けなければならない。
ああ神様，お許しください，あなたはこんなにも親切で，
　私たちがいつも倒しているものを
あなたは牧者として再び起こしています。
　だから私たち悪人はあなたの手足をみな
忌み嫌い，呪っているのです。
　山羊が跳び出すと，あなたはそれを捜さなければなりません。
あなたは私たちの牧者だからです。
　私たちはあなたの大いなる価値を見落としがちです。
あなたが山羊を起こすと
　私たちは居ても立ってもいられず，
再びそれを倒し，
　あなたを山羊の見張りに駆り立てるのです。
あなたが恐ろしい言葉で
　最後の審判についてたくさん警告し，
羊は右側に立ち，
　山羊は左側に立って[3]
神の審判を受けるのだと言ったとき，
　あなたは山羊が罪人だということを
私たちにはっきり知らせてくれました。

しかしあなたはいつもその罪人の番をし，
25　その忠実な牧者をしています。
罪人はしばしばころび，
あなたはまっすぐ立て直します。
またあなたは罪人がまたころぶのではないかと
もう一度一生懸命見張っています。
30　罪人が一日に七の七十倍
あるいはいくらころんでも(4)
それでもあなたはいつもとても良い牧者なので，
罪人のせいで自分が落ちぶれてしまうまで
その人の番をやめません。
35　誰もあなたの恩寵などに感謝していないのに
よくもこんなに善良でいられるものだと
私は不思議でなりません。
いつも恥ずべき山羊を起こすことに
どんな楽しみがあるというのでしょう。
40　さあ，見張りはいいかげんにやめて
山羊倒しは禁ずると言いなさい。
しかし罪人たちはたとえ山羊がまだ立ち上がっていなくても
休みなく投石して，
善良な牧者を片わにする。
45　それでいてそれを恥じようとしないのだ。
足の麻痺はすでに以前，あなたが門のところで
つまづき，母親の前で倒れたときに
起こっていました。
それでもなおあなたは立ち上がり，再び
50　一生懸命，誠実に見張りをしました。
今や，あなたの山羊を倒しても，
それを悔やむ人は見あたりません。
あなたはもはや山羊の見張りができなくなったときもなお，
まわりを見渡していました。

55　　あなたは山羊に，神なるあなたの父の寵愛を獲得してくるでしょう。
彼らは何も知らないのですと言って，あなたは罪人たちを弁護しました[5]。
　　あなたは親切にもお願いをしました，
あなたを片わにした彼らを
　　父なる神は許してやってほしいと。
60　さらにあなたは親切にも
　　再び見張りを引き受け，
今でもなお性悪な山羊の番をしています。
　　自分が堕落していることも知らず，
自分の善良な牧者を見分けられず，
65　　恥ずべきほどに盲目になっている山羊の番をしています。
たとえ石を投げる人がいなくても，
　　山羊はあなたの足下に倒れます。
誘惑する人がいなくても
　　山羊はまっすぐに立っていようとしません。
70　山羊があまりにも倒れることに慣れて，
　　いつか静かに横たわったままになり，
永遠にあなたの怒りを買うのではないかと心配です。
　　そうなったら山羊は勝負に負けたことになります。
そのあとあなたが山羊を殴って追い返せば
75　　永遠の終わりです。
それゆえ私は次のような教訓を与えよう。
　　神が山羊を見張るという仕事をするために
私たちのところへやってきて，
　　非常に難儀をしながら私たちとともに奮闘しているからには
80　たとえほかならぬ好意でやっていることとはいえ，
　　その誠実な世話に感謝しなさい。
というのも，私たちが山羊を倒してしまうのに，
　　神はまたそれを起こしているのだから。

しかしお前が感謝しなかったら，
85　神は同じ歩調でお前に追いつき，
その牧者の杖でお前に触るだろう。
　そうなるとお前自身働きに出て
同じ時間だけ見張りをしなければならなくなる。
　これは哀れな山羊にとってはあまりにもつらく，
90　哀れな罪人にとっては決していいことではない。
　もし神が見張りをやめて，
死すべき人間が番を引き受けなければならなくなれば，
　人間は阿呆たちといっしょに
まったく見知らぬ道を行かなければならないだろう。
95　その道は in nobis hus（地獄へ）と呼ばれている。
その中は暑く，外は寒く，
　窓から炎が吹き出す。
神様，このような家から守ってください。

注

(1) この章は阿呆に対する批判ではなく，神の子イエスのこの世での役割について述べている。
(2) der geiß hietten「山羊を見張る」は，棒（Geiß）を倒す者と起こす者が競い合う子供の遊びをも意味する。作者ムルナーは，罪人を正しい道に導こうとする神の姿を棒を起こす者になぞらえている。
(3) 新約聖書，マタイによる福音書，25, 31－33参照。
(4) 新約聖書，マタイによる福音書，18, 21－22参照。
(5) 新約聖書，ルカによる福音書，23, 34参照。

第八章[1]　匙[2]をけずること

ここで私は大小の匙をけずっている，
　誰もがお望みしだいの匙を見つける。
ここで自分にぴったしのを見つけることができない人は，
　どこへ行ってもおそらく手に入れられまい。

私は匙けずりには自信がある，
　　しかしその匙で舌をやけどするのもしばしばだ。
郭公だって一羽ごとに鳴き声が違う，
　　だから匙も多種多様だ。
5　大きいの小さいの，古いの新しいの，
　　匙野郎のやり方も様々だ。
財産やお金とひきかえに結婚する奴は，
　　匙野郎の一人に数えられる。
自分を色男だと思い，
10　　女にびた一文貢がなくても，
どの女も自分と別れたり，
　　捨てたりはしないと思ってる奴，
そういう匙野郎を私は笑わざるをえない。
　　女に鼻先をつままれ，引っ張り回されているのに，
15　お世辞を言われて，
　　女の口車にのせられる奴は
匙野郎の素質じゅうぶんだ。
　　そ奴は女と目があうと，
たちまちそわそわして落ち着かない，
20　　女とは一マイルも離れているのに。
匙野郎はこの世にまだたくさんいて，
　　老齢になってはじめて匙野郎になり，
若い頃したとおりのことを，
　　馬鹿女に教えられたとおりのことをする。
25　人の一生には潮時というものがあるのだから，
　　若者の身なりに老人を
組み合わせることはどうしてもできない。
　　なぜお前はそんなに派手な身なりをしているのか，
長年松葉杖をついて，
30　　両頬にしわをきざんでいるのに。
「そうなんだ」と世間の人々は言う。「奴の心臓は若々しい。

本当にあの若い血潮はどこから来るのだろうか。」
眉目秀麗でもないのに，そう自惚れる奴は
　匙野郎と五十歩百歩だ。
35　世間の人々の口車に乗せられ，
　金持ちでもないのに金持ちと自惚れる奴，
身内すべてが田舎者なのに，
　自分を高貴な生まれと思い，
さらに自分が利口で賢明だと自惚れる奴，
40　　最近やっと鋤を手離したのに，
まるで阿呆を支配できるかのように，
　以前からでかい態度で威張りくさってる奴，
私はそ奴の特権を剥奪してやる，
　匙を買わなくてもよいように。
45　鍋のなかには
　噂のレンズ豆粥が出来上がっていた。
するとそれ欲しさにエサウは自分の長子権を
　弟のヤコブに譲った(3)。
エサウは自分が相続する財産をレンズ豆にかえて食べたのだから，
50　　奴も匙野郎だ。
巷に流布する噂によると，
　ドッチンガー(4)という奴は自分の驢馬を
笛というくだらぬ物と交換したのだから，
　こいつも匙野郎だ。
55　移ろわぬものを移ろうものと交換する奴は，
　その交換に満足することがない。
というのは，笛をもらって驢馬をさしだす奴は，
　驢馬に乗りたいとき，歩いて行かねばならぬ。
若い匙野郎がすることをよく覚えておけ。
60　　匙野郎は自分の相続分，全財産を食い尽くす，
そ奴の父親や身内が
　四十年かかっても稼げなかったものを，

一年で蕩尽することができる。
　　こうした連中が匙野郎でないと，誰が言えようか。
65　奴らは灰汁が手に入るかぎり，それを使う，
　　それがやがて乞食に身を落とすことをはやめる。
以前奴らにはどんなお酒も御馳走も美味しくなかったが，
　　今では放蕩息子と一緒に
糠を喜んで食べている。
70　　匙野郎は己の分を知らず，
それに加えて安らぐこと，落ち着くことがなく，
　　ついには全財産を蕩尽して，
やっとせいせいしたと思う。
　　賢明なお方ならどなたでも，
75　私がここでけずっている匙の大小が
　　何を意味しているか，御存知だ。

注

(1)　この章は，道に外れた恋を追い求め，無用な散財をする男に向けられている。
(2)　原語　Löffel には「匙」という意味のほかに「阿呆」「軟派男」という意味があり，本章では両方の意味で使われているので，「匙」と「匙野郎」で使い分けた。
(3)　旧約聖書　創世記　25，27－34 参照。
(4)　分のわるい交換をする阿呆話の主人公の名と思われるが，詳細不明。

第九章[1]　尻を滅多打ちにして改心させること

女たちもここへ連れて来て，
　　十二本の丈夫なはしばみの棒で
その尻を打ちすえ，女たちから
　　阿呆を追い出さねばならない。

我々男を惑わす女たちが，
　　全部四方八方から，

尻を叩かれにやって来るならば，
　　それに私は千グルデン出してやろう。
5　ああ，私がこういう阿呆祓いができるように，
　　女たちが進んで来てくれたらいいんだが。
女には一癖あって，
　　尻の滅多打ちを控えたり，
堆肥の中へ叩き込むほど殴らない男には，
10　　好意を持たないと言われている。
私の技で分かった事がもう一つある。
　　どの先生も御存じとは限らないが，
阿呆女とはどういうものかということ，
　　いずれもすぐ阿呆男を見つけるということ。
15　見つけると，阿呆女は男にばらの花束を贈る――
　　阿呆女は家の中，阿呆男は家の外――
花束は青い絹ひもで結わえてある。
　　その心は，こちらも阿呆，そちらも阿呆。
それが緑の絹ひもで結わえてあれば
20　　その心は，いとおしいお馬鹿さん，さようなら。
男がその花束を受け取ると，
　　その阿呆男はすっかり虜になって，
女に一本の麦藁で結びつけられる。
　　世の中にはこんな大馬鹿もいるものだ。
25　女が男に小さな花束を贈っても，
　　男がそれに返礼の贈りものをしようとしないと，
女は男に立派な花冠を作ってやり，
　　その代わりに，高価なお返しを求める。
男は花冠にはスカートを贈るが，
30　　それが手かせ足かせとなり，身を亡ぼすものが多い。
この事が女に旨く運ぶと，
　　阿呆男の気を引くことができるように，
女は阿呆男に胸をはだけて，

　　胸に黒い色のひもをかける。
35　それから女は首からひもを外し，
　　すべてをしとやかに男に贈る。
　すると男は狂ったように走り出し，
　　そのひもの返礼のために，
　新品の毛皮を持って来る。
40　　阿呆女は男の首にすがりつく。
　「ねえあなた，やめて。
　　贈りものが欲しくてこんなことしたんじゃないわ」
　と言って，まるで荷物が一袋落ちたろばのように，
　　激しく男に抵抗する。
45　阿呆男はひどく嘆き悲しんで言う。
　　「ああ，ひどい，お前はわしを蔑んで拒むのか。」
　私には一切が悪ふざけに思われるが，
　　もし男が以前手に入れた物を持参すれば，
　全てをすげなく拒まないのが，
50　　阿呆女たちのやり方だ。
　それから女も男にスカーフを贈る。
　　四方に黒の縁飾りがしてあるだろう。
　縁飾のあるスカーフは大きくはなく，
　　一本の指に掛けられる程である。
55　男はスカーフを自分の首に急いで結びつけ，
　　仲間が沢山いる所へ着けて行く。
　「やったぞ。あの娘(こ)がこれをおれにくれたんだ。
　　あの娘(こ)がおれの傍にいたんだ。彼女に幸せあれ。」
　阿呆女が男に会って，
60　　男がスカーフを首に巻いていれば，
　女はそれを利用して男を誘惑し，
　　緑色のペティコートを要求する。
　女はもし自分の願いが叶えられなければ，
　　男が自分の保証人になって，織物商の前で

65　代金の肩代わりをしてくれるように頼み，
　　私は自分の手で紡いで，
あなたに毎週一シリングを渡します，
　　さらに別に金儲けをするからと言う。
阿呆男が肩代わりしてくれると，
70　　女は別の男のところへ行き始める。
阿呆男がそれを不服として腹を立てたら，
　　女は泣きながら，自分が儲けて
あなたの借金を返すために，残念ながら
　　そうせざるを得ないと言う。
75　すると阿呆男が言う。「ああ，そんな話は止めてくれ。
　　ねえお前，わしの願いを聞いてくれ。
お前が他の男の許へ行かねばならんと
　　言う言葉を，お前から聞くくらいなら，
お前にスカートを贈るつもりだし，
80　　ヴェールやオーバー，その他沢山やるつもりだ。
足許から頭まで着飾らせてやる。」
　　女は密かに阿呆男をあざけって舌を出す。
花冠も紐も布も
　　阿呆女は高値で売りつけたのだ。
85　こういう阿呆男から，阿呆女を
　　信じてだまされる男を，すべて知ってくれ。
しかし，だまされる女もいるが，
　　私がいろいろ次々
調べてみると，女たちの損にはならず，
90　　女はしばしば自分の体で支払っている。
私が阿呆男をお祓いして，
　　女の欺瞞に気づき始めると，
その男は家の扉を中から錠を下ろし，
　　阿呆女の尻を樫の棒で
95　引っぱたくはずだ。

さらにベッドも食卓も別にする。
阿呆女を祓うには樫の棍棒で
打ちすえるのが一番よい。
そして女を手で殴ってあざを作ってやるがよい。
100　その色は青でも赤でも，また
緑でも黄色でも，男が花束を結わえた
紐と同じ色がよい。ただ一発でもやり損なわぬよう，
よく注意すること。一発でも失敗したら，
私の技が身に付いていなかったのだろう。
105　阿呆女共，集まって来て，
この技を私から聞いて分かったら，
私に贈物でも買っておけ，
この技を生み出したのは私なのだから。

注

(1)　この章は男を誘惑する女性と，それにうつつを抜かす男性への批判である。

第十章[1]　ろばの腹帯を締めること[2]

今やっと賢明にもやり始めたぞ，
私はろばの腹帯を締めることができ，
腹帯を腰がつぶれるほどしっかり締めて，
ろばを笑えなくしてやる。

お前たちろばには，腹帯を
締めることのできる格好の牧者がいる。
こっちにこい，こっちだ，私たちは仕事にとりかからねばならない。
お前が貴族で
5　生まれながらに良い縁者に恵まれていても，
ろばの耳を突き出して，
ろばの腹帯をするのにふさわしく，

強情にろばであり続けたがっていることは
明白だ。
10　一人の司祭がお前のところに行っても，
お前は出された四万ポンドを受け取らない，
神の掟が示しているようには，
お前は司祭に敬意を払わないし，
神の僕（しもべ）の姿をした司祭を敬うことをしないためである。
15　お前は自分の力で世に出て，
ここ地上では他の誰をも必要としないかのようで，
ひいてはすべての人々を嘲ることになる。
すると司祭たちをみな憎むような
敵意を示して，
20　かつてはお前も突っ立てていたあの一物を
切り取ってしまうぞと司祭たちを脅す。
切り取ってしまえば，真っ当な料理女にとって，
司祭が来ても縁なき客に過ぎ無かろうと言うわけだ。
私が言うことを，よく理解してくれ。
25　司祭が前を歩いて行くと，
お前は淫らに勘ぐって言う。
「こん畜生，誰か戸の閂をかけろ。
坊主が俺たちのところに来ようものなら，
女房はろくなことはしてくれないぞ。
30　戸に閂をかけろ。糞ったれ。」
司祭が女をどんな風に傷ものにするというのか。
お前の妻は操をたてるだろうし，
司祭は敬虔な男ということになるだろう。
それでもお前はろばの姿で駆け回るわけだ。
35　縁者がみな人間でも，
お前の方は何処にいてもろばのままだ。
さあ，阿呆，お前は何処で習ったのか，
司祭はかくも尊敬し，

臨終にあたってお前が是非とも欲しいと思う
40　神の僕(しもべ)はかくも侮辱するものなどと。
ある男がお前の下男を殴りでもすると，
　お前は不当だと思って，
ついには自分で復讐し，
　自分の手で突き殺すことになるだろう。
45　その際当然知ることになるのだ，
　神は復讐しないではおかれないし，
地上で神の僕(しもべ)を罵る者は
　あの世では地獄の劫火の中で贖罪することになることを。――
これは本当にひどい阿呆で，
50　女の名誉を侮辱し，蔑む。
女はいつも身持ちが変わらないわけではない，
　男に言い寄られると，
女は弱さから身を任せるだけだ。
　阿呆のお前は飲んでは，
55　何故どこでもこんな女を辱めるのか。
　そらそら，お前たちをもっときつく締めつけねばなるまい。
ある阿呆は，女たちをもっと辱めて，
　男の栄誉を受けたがり，
今では，こんな目に遭わせた女の
60　数の多さを誇っている。
私が腹をたてるのも当然だ。
　お前たちは悪魔の手にかかるがいい。
女や司祭たちをかくもひどいく辱め，
　本性の中に隠されているものを
65　いつも表に出せなどと，
　誰がお前に教えたのか。――
老阿呆もまだまだ沢山いる，
　私は一人の老阿呆のことを言っているのだ，
そ奴は今やすっかり精力はなくなり，

70　百才にはなっているだろう。
たぎる精気なんてものは勿論すっかり失せ，
　淫乱の果て，尻の肉はすっかり落ちている，
それでも相変わらずろばの耳がついていて，
　昔の行状を誇り，
75　もはや昔のような淫行には
　およべないのを嘆いている。——
若者の腹帯をも締めてやるぞ。
　こ奴は雄鶏の羽をつけ，
　二十人の女をいっぺんにお相手できるつもりでいる。
80　それ故処女を侮辱する。
　これら総てろばの仕業である。
色ごとや女遊びで，
　どれほどの運に恵まれたかを
誇ることで，
85　ある阿呆は自ら自分の恥をさらしている。——
冗談が未だ分りもしないのに，
　手当たり次第からかい，侮辱しておきながら，
自分では二度と受けつけようとしない。
　私はそんな奴にろばの前を歩かせる。
90　そ奴はいつまでたってもがさつ者だ，
こんな奴を真っ当なドイツ語では豚という，
　その耳はいつも大きい。
お前が神のご命令を実現したいなら，
　どうか神の僕（しもべ）を敬い，
95　永遠の祝福を貰ってくださる
　一人の女性のために全女性を敬え。
その女性とは永遠の歓びをもたらしてくださる
　汚れなき処女，優しいマリア様のことだ。

注

(1) この章は僧侶や敬虔な女たちの敵を批判している。

(2) 「腹帯を締める」とは「厳しくしつける」の意